

感染症発生動向調査情報による徳島県の患者発生状況（2021年）

徳島県立保健製薬環境センター

西殿 裕子・角宮 由華・吉田 知位子

Infectious Diseases Surveillance Reports in Tokushima Prefecture in 2021

Hiroko NISHIDONO, Yuka KAKUMIYA, and Chiiko YOSHIDA

Tokushima Prefectural Public Health, Pharmaceutical and Environmental Sciences Center

I はじめに

当センターでは、「徳島県感染症発生動向調査実施要綱」に基づく徳島県感染症情報センターとして、徳島県における感染症の発生情報の収集、解析を行っている。解析した情報は週報や月報として医療機関や県民等に還元し、感染症の拡大防止や公衆衛生の向上に努めている。

今回、2021年1月から12月までの患者発生状況についてまとめたので報告する。

II 方法

感染症発生動向調査における患者届出対象疾患は、「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」により指定されている一類から五類感染症、新型インフルエンザ等感染症の91疾患（全数把握対象疾患）、指定届出機関から届出を受ける25疾患（定点把握対象疾患）とした。

感染症の発生情報は、定点把握対象疾患のうち、内科、小児科、眼科及び基幹定点週報分は、月曜日から日曜日までの週単位で、性感染症定点及び基幹定点月報分は月単位で集計解析を行った。

III 結果及び考察

1 全数把握対象疾患の届出状況（表1）

(1) 一類感染症

一類感染症の届出はなかった。

(2) 二類感染症

① 結核

年間届出数は131件で、2016年以降、漸減傾向にあったが、2021年は前年（123件）より増加した。月別の届出数で

は、季節的な特徴は認められなかった。類型では、「患者」が93件、「無症状病原体保有者」が38件であった。

届出者を年齢別にみると、高齢者からの報告が多く、50歳以上が112件と全体の約85%を占めた。性別では、男性60件、女性71件とやや女性が多かった。

年齢別に類型を比較すると、70歳以上では「患者」が72件（83.7%）と大部分を占めたのに対し、70歳未満では「患者」が21件（46.7%）、「無症状病原体保有者」が24件（53.3%）と、「無症状病原体保有者」の割合が高かった。

また職業別では、医療・介護施設関係者が見られたが、これらの施設は、結核の既感染者や免疫が低下している高齢者が多く集まり、感染リスクが高いため、施設関係者等に対し感染予防啓発、施設内感染対策の徹底が重要と考えられた。

(3) 三類感染症

① 腸管出血性大腸菌感染症

年間届出数は19件で、過去5年間では最も多かった。月別では、3、6～11月で届出があり、9月に9件と多く報告された。年齢は全て50歳未満であり、性別は男性12件、女性7件であった。診断の類型では「患者」が14件、「無症状病原体保有者」が5件と「患者」が多く報告され、血清型別では本疾患の多くを占めるO157の他、O26、O111、O112abが報告された。

「患者」の感染経路は、経口感染9件（肉の喫食6件、その他3件）、その他1件、不明4件で、感染地域は国内13件、不明1件と推定された。また「無症状病原体保有者」では、「患者」との接触感染が2件、不明3件で、感染地域は国内4件、不明1件と推定された。

(4) 四類感染症

① 重症熱性血小板減少症候群

3件届出があった。昨年は報告がなく、本年は2年ぶりの報告となった。届出月は6, 8, 10月と、マダニの活動時期にあたる春から秋に集中していた。年齢及び性別は60～80歳代の男性2件、女性1件であった。感染経路は農作業などの野外活動時にマダニ等に刺咬され感染したと推定された。

徳島県では本疾患をはじめ、つつが虫病、日本紅斑熱など、病原体を保有するマダニ等の刺咬による感染症が、毎年のように報告されており、重症化例も見られる。近年、キャンプや登山などの人気の高まりを受け、草むらや山林などマダニの生息地に人が近づく機会が増えており、アウトドアレジャー、林業、農作業など野外活動の際、ダニ・昆虫媒介性疾患に対する予防対策の啓発が重要と考えられた。

② 日本紅斑熱

10件届出があった。過去5年間での年間届出数推移は4～12件と、年毎で差が大きい。届出月は5～10月と、重症熱性血小板減少症候群と同様にマダニの活動時期と一致していた。年齢は50～90歳代で、性別は男性2件、女性8件であった。感染経路は農作業等の野外活動時にマダニに刺咬されたと推定された。

③ レジオネラ症

23件届出があった。2014年以前は毎年1～3件の報告数で推移していたが、2016年以降は毎年10件を超えており、本年は過去5年間で最も多い報告数となった。届出月は、4, 5, 7, 8, 10～12月で、40～90歳代と幅広い年齢層から報告され、性別は男性19件、女性4件であった。病型は20件が「肺炎型」で、3件が「ポンティアック熱型」であった。推定感染経路は水系感染が6件、塵埃感染が2件、その他3件、不明12件、感染地域は国内19件、不明4件であった。

(5) 五類感染症

① アメーバ赤痢

2件届出があった。年齢及び性別は30歳代と60歳代のいずれも男性で、病型は「腸管アメーバ症」であった。推定感染経路は不明で、感染地域は国内と推定された。

② カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症

13件届出があった。年齢は50～90歳代で、性別は男性8件、女性5件であった。推定感染経路は手術部位や医療器具を介しての感染が4件、以前からの保菌が5件、その他3件、不明1件であった。感染地域は国内11件、不明2件と推定された。

③ 急性脳炎

1件の届出があった。年齢及び性別は、70歳代の男性であった。検出された病原体は「単純ヘルペスウイルス」で感染経路は不明、感染地域は国内と推定された。

表1 全数把握対象疾患の届出数

類型	疾病名	2021年	前年
二類	結核	131	123
三類	腸管出血性大腸菌感染症	19	17
四類	重症熱性血小板減少症候群	3	0
	日本紅斑熱	10	7
	レジオネラ症	23	21
五類	アメーバ赤痢	2	1
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	13	7
	急性脳炎	1	0
	クロイツフェルト・ヤコブ病	3	2
	後天性免疫不全症候群	4	3
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	3	5
	侵襲性肺炎球菌感染症	6	7
	水痘（入院例）	4	3
	梅毒	23	23
	播種性クリプトコックス症	4	2
	破傷風	4	1
百日咳	43	3	
(※)	新型コロナウイルス感染症	3,092	199

(※)：新型インフルエンザ等感染症

④ クロイツフェルト・ヤコブ病

3件届出があった。年齢は60歳代～80歳代で、性別は全て男性であった。病型はいずれも「古典型クロイツフェルト・ヤコブ病」で、感染経路・地域は不明であった。

⑤ 後天性免疫不全症候群

4件の届出があり、過去5年間では毎年3～9件報告されている。年齢別は20歳代1件、30歳代2件、70歳代1件で、性別は全て男性であった。類型はいずれも「患者」で、感染経路は同性間での性的接触2件、その他1件、不明1件であった。感染地域は、国内での感染が3件、不明が1件と推定された。

例年、県内保健所で実施された無料検査にて発見され、地域連携医療機関での診断、報告につながっているが、本年は新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、検査の機会が減少したため、十分な診断に結びつかなかった可能性が懸念される。今後も、積極的な普及啓発を推進し、HIV感染の早期発見による早期治療と、感染拡大の抑制に努めることが重要と考えられた。

⑥ 侵襲性インフルエンザ菌感染症

3件の届出があり、過去5年間の届出数は1～5件で推移している。年齢別は10歳未満1件、40歳代1件、90歳代1

件で、性別は男性2件、女性1件であった。いずれも国内にて感染したと推定された。

⑦ 侵襲性肺炎球菌感染症

6件届出があり、過去5年間では毎年6～11件報告されている。年齢別は10歳未満3件、10歳代1件、70歳代1件、80歳代1件で、性別は男性5件、女性1件であった。感染地域は全て国内と推定された。

⑧ 水痘（入院例）

4件届出があった。年齢別は10歳未満1件、40歳代1件、50歳代1件、60歳代1件で、性別はいずれも男性であった。感染地域は全て国内と推定された。

⑨ 梅毒

23件届出があった。年齢別は10～40歳代15件、50歳代～60歳代5件、80歳代3件と若年層に多く、性別は男性12件、女性11件で、女性の約45%は「無症状病原体保有者」であった。感染地域は国内での感染が20件、不明が3件であった。

現在、我が国では若年層を中心に梅毒患者の増加が大きな問題となっている。HIVと同様に、発生報告の多い10～40歳代を中心に、感染者及びパートナーともに積極的な感染予防啓発が重要と考えられた。

⑩ 播種性クリプトコックス症

4件届出があり、過去5年間の届出数は0～3件で推移している。年齢別は50歳代1件、70歳代2件、100歳代1件で、性別は男性2件、女性2件であった。感染原因はいずれも免疫不全で、感染地域は国内と推定された。

⑪ 破傷風

4件届出があった。年齢別は40歳代2件、80歳代2件で、性別は男性1件、女性3件であった。感染経路はすべて創傷感染で、感染地域は国内と推定された。

⑫ 百日咳

百日咳は、以前は小児科定点把握疾患として報告されていたが、2018年1月1日より五類全数把握対象感染症に指定された。2019年は80件、2020年は3件と、昨年は大幅に減少したが、本年の届出数は43件と再び増加した。年齢別は10歳未満31件、10歳代9件、30歳代3件で、性別は男性22件、女性21件であった。感染経路は家族内感染が14件、児童福祉施設や学校関連の感染が12件、不明が17件であった。感染地域はいずれも国内であった。

（6）新型インフルエンザ等感染症

① 新型コロナウイルス感染症

2020年2月1日より指定感染症と定められ、2021年2月13日からは、期限の定めなく対策が講じられるよう、新型インフルエンザ等感染症の中に新型コロナウイルス感染症、

再興型コロナウイルス感染症を追加することと改正された。

本年の届出数は3,092件であり、月別届出数は8月の954件が最も多く、次いで4月の773件、9月の509件の順であった。春先や長期休暇など人々が移動する機会が多い時期に感染者が増加する傾向が認められた。年齢別では、20歳代が654件と全体の約21%を占めた。続いて40歳代451件、10歳代435件、30歳代399件の順に多かった。性別では男性1,698件、女性1,394件と男性が多かった。

また医療・介護施設や学校などでの集団感染が見られたことより、感染拡大防止のため施設や学校関係者等に対し、感染予防啓発、施設内感染対策の徹底についての注意喚起が不可欠と考えられた。

2 定点把握対象疾患（週報）の動向（表2）

（1）内科，小児科定点

① インフルエンザ（鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く）

年間報告数は4件であり、2019年は10,024件、2020年は3,095件と、2年連続で大きく減少した。報告があった週は第12週、14週、51週のみであった。年齢層別報告数では、4歳以下1件、20歳代1件、80歳以上2件であった。

本年は全国的にも大きな流行はなく、新型コロナウイルス感染症による衛生意識の向上、行動の自粛や制限が大きく影響したと考えられた。

（2）小児科定点

① RSウイルス感染症

年間報告数は2,912件と、前年（140件）より大きく増加した。本疾患は2017年以降、夏から秋にかけて流行しており、本年も第27週から報告数が増加し、第30週にピーク（22.52件/定点）を迎えた。第27週～35週で、全国平均を上回り、この間の報告数は年間の約87%を占めた。

本疾患の発症の中心は、前年までは2歳未満であったが、本年の年齢層別報告数は、0歳19.0%、1歳29.1%、2歳24.4%、3歳16.3%、4歳以上11.2%であり、前年の報告数と比較して0歳の占める割合が大きく減少し、2歳以上の割合が増加した。

② 咽頭結膜熱

年間報告数は242件と、前年（222件）より増加した。本疾患の流行パターンは、6月ごろから報告数が増加し始め、7～8月にピークが見られる。本年は5月下旬頃より報告数が増加しはじめ、6月は全国平均を上回り、第24週にピーク（1.22件/定点）を示した。

年齢層別報告数は、0～1歳52.9%、2～3歳32.7%、4～5歳13.6%、6～7歳0.4%、8歳以上0.4%であり、5歳以下が約99%を占めた。

表2 内科，小児科，眼科定点報告対象疾患の週別報告数

週	期間	小児科定点											眼科定点	
		インフルエンザ	RSウイルス感染症	咽頭結膜熱	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	感染性胃腸炎	水痘	手足口病	伝染性紅斑	突発性発しん	ヘルパンギーナ	流行性耳下腺炎	急性出血性結膜炎	流行性角結膜炎
1	1/4~			12	7	54	2			8	1	1		
2	1/11~		1	3	11	63	4			8		1		
3	1/18~		6	6	15	77	2			5	3	1		
4	1/25~			6	10	64	2			9	5			
5	2/1~		5	7	5	52	1			7	1			1
6	2/8~			4	5	55	2			7	6			1
7	2/15~			2	6	59				11	3			
8	2/22~		1	3	3	31	4			4				
9	3/1~			4	4	47			1	9				
10	3/8~			1	9	43	3			13		1		1
11	3/15~				7	37	2			6				
12	3/22~	2		3	5	50			1	9				1
13	3/29~		1	4	2	26				10				1
14	4/5~	1	2	1	4	53	4			11	1	1		
15	4/12~		1	1	8	48	2			17				
16	4/19~			1	7	80	3			14				
17	4/26~			3	8	72	2	1		14	1			
18	5/3~			4	3	60	1	2		8				
19	5/10~		3	3	11	72	2			4		2		1
20	5/17~		2	6	6	86	2	1		10	5	2		1
21	5/24~		10	10	7	84			1	14	4	3		
22	5/31~		8	8	7	72	2			12	9	1		1
23	6/7~		22	13	6	73	2			15	29			
24	6/14~		45	28	10	95	2	1		10	15			
25	6/21~		85	16	7	87	2	1		10	24			
26	6/28~		82	12	5	69	6	1		7	23			
27	7/5~		176	10	7	87	3	1		17	58			
28	7/12~		465	3	8	81	3	2		12	55	1		
29	7/19~		455	11	4	56	3	1		9	38	2		1
30	7/26~		518	4	2	67	15		1	10	17			1
31	8/2~		423	2	2	82	3			4	20			1
32	8/9~		215	1	2	55		1		8	7			
33	8/16~		158	3		71	4			13	6			
34	8/23~		68		3	130	2			9	7	1		
35	8/30~		65	5	3	127	7		1	11	3			
36	9/6~		41	1	2	139	3			8	4	1		
37	9/13~		31		2	150	1			9	1	1		
38	9/20~		12	2	5	152	4			9	3	1		
39	9/27~		4	1	1	122	2	2		14	7	1		
40	10/4~		3		3	125	2			10	4			
41	10/11~		2	3	11	83				9	8			
42	10/18~		1	1	1	93	3	6	1	9	3	2		1
43	10/25~				4	95	4	15		8	2			
44	11/1~				3	82		31		6		1		
45	11/8~			1	1	102	3	71		11	8	1		1
46	11/15~					90	1	126		9	4			1
47	11/22~			3	1	90	4	90		6	6	3		
48	11/28~			6	1	100		75		7	8			3
49	12/6~			5	5	164	3	77		12	3			1
50	12/13~			9	4	169	1	78		13	2			1
51	12/20~	1		7	1	157	4	68		10	5			
52	12/27~		1	3		119	1	27		7	2	2		2
合計		4	2,912	242	254	4,397	128	678	6	502	411	30	0	21

インフルエンザ定点：内科定点と小児科定点を合わせてインフルエンザ定点とする

③ A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎

年間報告数は 254 件と、前年 (475 件) より大きく減少した。本疾患は、冬季および春から初夏にかけて報告数が増加するとされるが、本年は、年間を通じて目立ったピークも無く報告数の低い状態 (0.65 件/定点以下) が続いた。

年齢層別報告数は、0~1 歳 5.1%、2~3 歳 24.4%、4~5 歳 33.1%、6~7 歳 16.1%、8~9 歳 7.5%、10~14 歳 5.9%、15 歳以上 7.9%と、2 歳~7 歳の割合が高かった。

④ 感染性胃腸炎

年間報告数は 4,397 件と、前年 (3,365 件) より大きく増加した。本疾患の流行パターンは、初冬から増加し 12~1 月頃に一度ピークが見られた後、春にもう一度なだらかなピークができ、その後初夏までだらだらと続くことが多い。本年は前期流行は見られず、8 月下旬から報告数が増加し、第 38 週でピーク (6.61/定点) が見られ、第 27 週から 46 週では全国平均を上回った。後期流行は 12 月にピーク (第 50 週 7.35 件/定点) を示した。

年齢層別報告数は、0~1 歳 28.7%、2~3 歳 29.1%、4~5 歳 12.8%、6~7 歳 6.4%、8~9 歳 4.0%、10~14 歳 8.2%、15 歳以上 10.8%と 5 歳以下の乳幼児が全体の約 70%を占めた。

⑤ 水痘

年間報告数は 128 件と、前年 (192 件) より減少した。本疾患は年間を通して発生するが、主に冬から春にかけて流行するとされる。本年は第 30 週に全国平均を上回ったが、その他の週に大きなピークは見られず、年間を通じて低水準 (0.00~0.26 件/定点) のまま推移した。

年齢層別報告数は、0~1 歳 11.7%、2~3 歳 21.1%、4~5 歳 27.3%、6~7 歳 14.9%、8~9 歳 12.5%、10 歳以上 12.5%と 10 歳未満の報告が全体の約 88%を占めた。

⑥ 手足口病

年間報告数は 678 件と、前年 (71 件) より大きく増加した。本疾患は夏期に流行する代表的な感染症であり、近年、報告数は年によって大きく異なっている。本年は、年当初は報告数が少なかったものの例年とは異なり、第 42 週から増加し始め、11 月にピーク (5.48/定点) を示し、その後も報告数が多い状態が続いた。

年齢層別報告数は、0~1 歳 56.2%、2~3 歳 37.9%、4~5 歳 4.3%、6~7 歳 0.6%、8 歳以上 1.0%であり、5 歳以下からの報告が全体の約 98%を占めた。

⑦ 伝染性紅斑

年間報告数は 6 件と、2019 年初夏から 2020 年春まで流行が見られた前年 (115 件) より大きく減少した。本疾患は、例年、年始頃より 7 月上旬にかけて増加するが、流行の小さい年は季節性が見られないことが多い。本年は、年間を通じ

て低水準 (0.00~0.04 件/定点) で推移した。

年齢層別報告数は、0~1 歳 33.3%、2~3 歳 33.3%、4~5 歳 16.7%、8~9 歳 16.7%と、5 歳以下の乳幼児での割合が高かった。

⑧ 突発性発しん

年間報告数は 502 件と、前年 (514 件) より減少した。本疾患は、季節性も年次推移も認められず、年間を通じてほぼ一定の範囲内で推移するとされる。本年もピークは示さず、大きな季節的変動も見られないまま、報告数は一定の範囲内 (0.17~0.61 件/定点) で推移した。

年齢層別報告数は、0~1 歳 90.4%、2~3 歳 9.0%、4~5 歳 0.4%、6 歳以上 0.2%と、1 歳以下が最も多く報告され、3 歳以下で大半を占めた。

⑨ ヘルパンギーナ

年間報告数は 411 件と、前年 (170 件) より大きく増加した。本疾患は、手足口病とともに主に乳幼児の間で流行する夏期の代表的な感染症である。本年は、第 27 週にピーク (2.52 件/定点) を示した。

年齢層別報告数では、0~1 歳 38.9%、2~3 歳 47.5%、4~5 歳 11.2%、6~7 歳 1.9%、8 歳以上 0.5%であり、5 歳以下の乳幼児が約 98%を占めた。

⑩ 流行性耳下腺炎

本年では流行は見られず、年間報告数は 30 件と、前年 (50 件) より減少し、年間を通じて低水準 (0.00~0.13 件/定点) で推移した。

年齢層別報告数は、2~3 歳 16.7%、4~5 歳 36.7%、6~7 歳 13.3%、8~9 歳 13.3%、10 歳以上 20.0%であり、4~7 歳の報告数が約 50%を占めた。

(3) 眼科定点

① 急性出血性結膜炎

本年は報告がなかった。過去 5 年間では 2019 年 (3 件) を除き毎年 0~1 件で推移し、徳島県内での流行は認められていない。

② 流行性角結膜炎

年間報告数は 21 件と前年 (29 件) より減少し、過去 5 年間では最も少ない報告数となった。県内では 2019 年に年間 117 件報告されたが、その後は低値で推移している。

年齢層別報告数は、10 歳代 4.8%、20 歳代 23.8%、30 歳代 14.3%、40 歳代 19.0%、50 歳代 28.6%、60 歳以上 9.5%と、主に 20~50 歳代の年代層が多かった。

(4) 基幹定点

① 細菌性髄膜炎

年間報告数は 1 件であった。前年は 3 件で、過去 5 年間では、毎年 0~4 件で推移している。年齢は 50 歳代であった。

② 無菌性髄膜炎

年間報告数は3件であった。前年は4件で、過去5年間では、毎年2～7件で推移している。年齢層別報告数は10歳代1件、20歳代1件、60歳代1件であった。

③ マイコプラズマ肺炎

年間報告数は7件と、2019年から2020年に流行が見られた前年(43件)より減少した。本疾患は、年間を通して発生するが、秋から春にかけてやや多くなるとされる。本年は、目立ったピークも見られず低水準(0.00～0.14件/定点)で推移した。年齢層別報告数は、5歳未満2件、20歳以上5件であった。

④ クラミジア肺炎

本年は報告がなかった。過去5年間では、毎年0～1件で推移している。

⑤ 感染性胃腸炎(ロタウイルス)

年間報告数は1件と、前年(1件)と同数であった。年齢は1歳であり、本年は45週に報告があった。

3 定点把握対象疾患(月報)の動向

(1) 基幹定点(表3)

薬剤耐性菌感染症の総報告数は209件と、前年(272件)より減少した。

① メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

年間報告数は209件(男性133件、女性76件)であり、前年(269件)より減少した。月別報告数では、月毎に増減はあったものの季節的な特徴は認められず、年間を通じて報告された。

年齢層別報告数は、10歳未満12.4%、10歳代2.4%、20歳代2.4%、30歳代1.9%、40歳代1.9%、50歳代4.8%、60歳代10.5%、70歳以上63.7%と、60歳以上からの報告が多かった。

② ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

本年は報告がなかった。過去5年では、0～5件の届出数で推移している。

③ 薬剤耐性緑膿菌感染症

本年は報告がなかった。過去5年では、毎年0～3件の届出数で推移している。

(2) 性感染症定点(表4)

性感染症の総報告数は571件で、前年(555件)より増加した。男女別では、男性397件(前年402件)、女性174件(前年153件)と、前年と比べ男性は報告数が減少し、女性は増加した。

① 性器クラミジア感染症

年間報告数は274件と、前年(255件)より増加した。月別報告数でも、月毎に増減はあったものの季節的な特徴は認

表3 基幹定点(月報) 報告対象疾患の月別報告数

	メチシリン耐性 黄色ブドウ球菌 感染症	ペニシリン耐性 肺炎球菌 感染症	薬剤耐性 緑膿菌 感染症
1月	21		
2月	21		
3月	28		
4月	11		
5月	11		
6月	11		
7月	19		
8月	17		
9月	9		
10月	18		
11月	21		
12月	22		
合計	209	0	0
前年	269	1	2

められず、年間を通じて報告された。男女別では、男性235件(前年224件)、女性39件(前年31件)と、男性・女性ともに前年より報告数が増加し、男性(約86%)の割合が高かった。

年齢層別報告数では、10歳代5.1%、20歳代47.8%、30歳代26.7%、40歳代13.5%、50歳以上6.9%と、20～30歳代からの報告が多かった。

② 性器ヘルペスウイルス感染症

年間報告数は177件と、前年(178件)とほぼ同数であった。月別報告数推移でも、月毎に増減はあったものの季節的な特徴は認められず、年間を通じて報告された。男女別では、男性61件(前年72件)、女性116件(前年106件)と、男性は前年より報告数が減少し、女性は増加した。また性感染症全体では男性が女性より多く報告されているが、本疾患は女性が約66%を占めるなど、女性の割合が他の疾患に比べ高いのが特徴である。

年齢層別報告数は、10歳代1.1%、20歳代14.7%、30歳代27.7%、40歳代23.2%、50歳代17.5%、60歳代6.2%、70歳以上9.6%と、20～50歳代が高かったものの、幅広い年齢層から報告された。また、60歳以上の高齢者からの報告数が15.8%と他の性感染症と比較して多い傾向が認められたが、潜伏していたウイルスによる再燃の可能性も考えられる。

③ 尖圭コンジローマ

年間報告数は65件と、前年(75件)より減少した。男女別

では、男性53件（前年60件）、女性12件（前年15件）と、男性・女性ともに前年より報告数が減少した。全体では男性（約82%）が多くを占めた。

年齢層別報告数は、20歳代33.9%、30歳代24.6%、40歳代21.5%、50歳代15.4%、60歳以上4.6%と、20～50歳代からの報告が多かった。

④ 淋菌感染症

年間報告数は55件と、前年（47件）より増加した。男女別では、男性48件（前年46件）、女性7件（前年1件）と性器クラミジア、尖圭コンジローマと同じく男性からの報告が多く、約87%を占めた。

年齢層別報告数は、10歳代3.6%、20歳代34.6%、30歳代27.3%、40歳代23.6%、50歳代以上10.9%であった。20～40歳代の割合が高く、全体の約86%を占めた。

表4 性感染症定点報告対象疾患の月別報告数

	性器クラミジア 感染症	性器ヘルペス 感染症	尖圭 コンジローマ	淋菌 感染症
1月	19	13	8	3
2月	21	6	8	6
3月	25	11	3	7
4月	20	11	5	5
5月	22	17	7	6
6月	26	22	5	6
7月	31	10	8	11
8月	24	15	4	2
9月	20	19	3	5
10月	25	20	4	2
11月	19	15	6	1
12月	22	18	4	1
合計	274	177	65	55
前年	255	178	75	47

IV まとめ

2021年の感染症発生動向調査に基づく患者発生状況について動向をまとめた。全数把握対象疾患では「新型コロナウイルス感染症」が最も多く、全体の大半を占めた。年間届出数は3,092件で、月別届出数では、4、8、9月に500人を超え、春先や長期休暇など移動する機会の多い時期に増加する傾向が認められた。年齢別では20歳代の若者の割合が高く、性別では男性が多かった。新しい変異株が次々と出現し、収束が見通せない中、改めて手洗いやマスク着用、換気などの基本的な感染症対策を徹底することが重要と考えられた。

「結核」の年間届出数は、昨年よりやや増加し、月別届出数から季節的な特徴は認められなかった。年齢別では50歳以上の高齢者の割合が高く、性別では「女性」がやや多かった。年齢別に類型を比較した場合、70歳以上では約8割が「患者」であったのに対し、70歳未満では「無症状病原体保有者」が約5割を占めた。また職業別において、医療・介護施設関係者など、集団感染に繋がる環境にある者も見られたため、さらなる感染予防についての啓発が不可欠であると考えられた。

「腸管出血性大腸菌感染症」は、2018年以降は県内では増加傾向にあり、夏季から秋季に集中して報告されている。感染拡大を防ぐため、手洗い・消毒の徹底、食品の十分な加熱及び衛生的な取り扱いなど予防啓発をしっかりと行うことが必要である。

「日本紅斑熱」、「重症熱性血小板減少症候群」などマダニ等の刺咬による感染症が、野外作業機会の多い中高年者を中心に多く報告された。ダニ・昆虫媒介性疾患に対する正しい知識の普及とともに、予防対策の啓発も重要と考えられた。

「梅毒」は、近年、全国的に届出が増加傾向にあり、徳島県においても、ここ数年高い報告数となっている。新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、県内保健所で実施されてきた無料検査の機会が減少している中でも、「後天性免疫不全症候群」と共に、例年並みの報告数があり、水面下で拡大している可能性も危惧されるため、今後の動向を注視したい。

定点把握対象疾患（週報）では、「インフルエンザ」が前年の報告数から特に減少が大きく、新型コロナウイルス感染症による、衛生意識の向上、行動の自粛や制限が、飛沫感染や接触感染の機会を減らしたためと考えられた。

一方、「RSウイルス感染症」は前年より増加が著しかった。例年2,000件前後で推移していたが、昨年は136件と大きく減少した。その間にRSウイルスにさらされていなかった幼児に感染が広がったと推察された。

「手足口病」は、全国的に流行パターンが例年とは異なり、本県でも11月にピークを示した。また「細菌性髄膜炎」や「無菌性髄膜炎」など報告数が少ない感染症は例年とあまり変わらなかった。

定点把握対象疾患（月報）の基幹定点報告疾患である薬剤耐性菌感染症については、総報告数に大きな変化は見られず、「メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症」が大半を占めた。

また、性感染症定点報告疾患について、総報告数は前年と変化がなく、男女別報告数も前年と同様に、男性からの報告が多かった。報告数の多い20～40歳代の男性を中心に、引き続き予防啓発を行うとともに、10歳代の若年者に対する予防教育も重要と思われた。

本年も新型コロナウイルス感染症による生活様式や公衆衛生への意識の変化が、他の感染症に大きな影響を与えた。飛沫感染や接触感染を主とする感染症の報告数が減少する中、一方では、今後、「RS ウイルス感染症」のように免疫が獲得

できず、増加に転じる感染症が増えることが考えられる。引き続き、関係する医療機関や保健所等の協力を得ながらデータの収集や解析を行い、感染症の発生動向に注意していくとともに、迅速かつ適切な情報提供を行っていきたい。